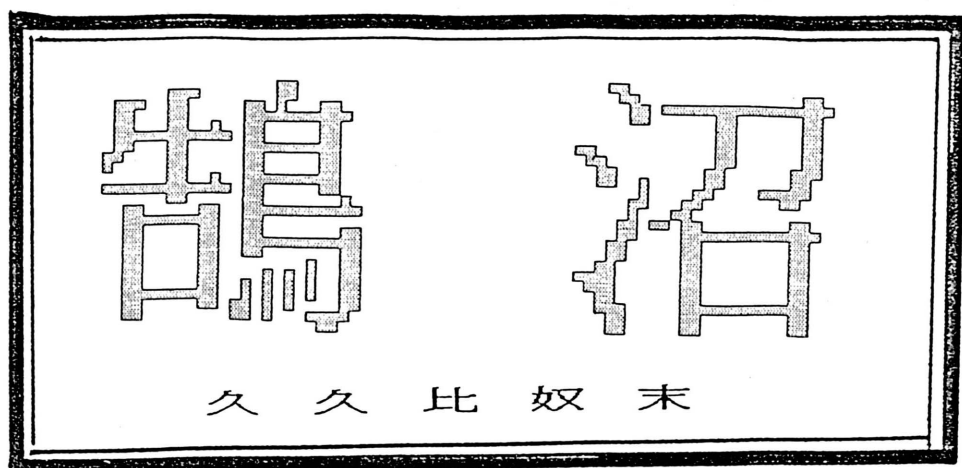




はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 3 8 号

1 9 8 7 年 9 月 8 日

鵜沼皇大神宮御祭神、天照大神
鵜沼三美人のこと

吉田 興一
田中まさ子

鵜 沼 を 語 る 会

鵜沼皇大神宮のご祭神天照大神

吉 田 興 一

1 はじめに

鵜沼皇大神宮については、宮司の関根さんがその御由緒を書いておられるので、私はその祭神天照大神について興味をもち、まづ、次の各種の文献等を調べてみた

- | | |
|------------------------------------|-------|
| a, 古事記の世界 | 川副武胤著 |
| b, 神社の古代史 | 岡田精司著 |
| c, 日本神話 | 上田正昭著 |
| d, 日本神話の謎 | 松前 健著 |
| e, 閉ざされた神々 | 沢 史生著 |
| f, 古代日本正史 | 原田常治著 |
| g, 謎の秀真伝 | 佐治芳彦著 |
| h, 日本史の謎と発見 1、日本人の先祖 | 毎日新聞社 |
| i, " 2、倭国の大乱 | " |
| j, 神奈川の歴史 | 中丸和伯著 |

さて、これらの資料に首を突つ込んだのであるが、いまだに論文を書くところまでには至らず、ただ仲々興味深い記述に出くわしたので、それらを紹介してみたい。

まず、天照大神は皇祖神として極めて尊いご神体であることはいうまでもない。しかし、戦前の国史教育の時代に、私たちは何の疑もなく神話を史実と受けとめさせられ、小学生のときですら何か不合理というか、物足りなく感じてきた。その反動として日本人のルーツ^を知りたいという欲求がことに強いのである。新旧石器、縄文、弥生、古墳と各時代の変遷のなかでこの日本列島に生そくした人類が、現日本人に至った過程を、限りない興味に包まれて知りたく思うのである。そこで、狭い知識ながら、さらには皆さんのご意見に耳を傾けたく、また一方、悠然と歴史を散歩する趣向にも魅力を感じ、以下とりくんでみたのである。

2 鵜沼皇大神宮について

まず、さしあたり鵜沼皇大神宮のご祭神天照大神についてテーマを絞る事になるが、その前に相殿の神々と境内社及び摂社について一応の説明を試みたい。

(1) 相殿の神々

ア、天手力男命

イ、天宇受売命

高天原において、天照大神がスサノオの乱暴極まりないしぐさに怒り、天石屋に籠つたとき、神々はこの石屋から外におでましを願おうと、天宇受売命が桶を伏せた台の上で、胸乳をかきいだし、裳ひもをほとに押したれて踊り、それを見て神々は大笑いしながら大騒をした。その騒ぎに大神は不審に思つて石屋の戸を少し押しあけたとき、天手力男命が戸を押し開きお手をとつて外へお連れ申しあげたと古事記にある。

ウ、天太玉命（布刀玉命）

エ、天児屋根命

この神々は、天石屋騒動のとき、その吉凶を占つた神々である。

オ、石凝姥命（伊斯許度売命）

この神も、天石屋騒動のとき鏡を作つた神とされている。

以上これらの神々は、ホノニニギの天孫降臨のとき随従した神々である。アメノコヤネは中臣連、フトダマノミコトは忌部首（いんべのおびと）、アメノウズメは猿女君、イシコリドメは鏡作連らの、それぞれの祖先にあたる。

（２） 境内社

ア、豊受神社

豊受はご存じの伊勢神宮の外宮である。

イ、稻荷神社

この神社の祭神は倉稻魂神、（うがのみたまのみこと）猿田彦命、大宮女命とある。倉稻魂神は櫛名田比売とスサノオとの間にできた神で、宇賀御魂ともいう。

ウ、巖島神社

祭神は市寸島比売命（別名巖島姫）、多紀理毘売命、多岐都比売命

この三姉妹の女神は、「天安河うけひ」の段でアマテラスとスサノオとの間に生れた神々である。また、北九州の宗像大社の祭神として特に有名である。

エ、石神社

巨大な石に神霊がこもるとする信仰、すなわち磐坐（いわくら）を神とあがめ、石を神の依代（よりしろ）とするお社であらう。

エ、山王社

日本神話のなかで、もう一つの降臨といわれるのが、大和を治めていたニギハヤヒノミコトで、神武天皇の御東征の際、ナガスネヒコは抵抗したが、ニギハヤヒは

恭順したといわれる。饒速日尊を祭神としている。（注）山王は大山咋神を祭神とするともいう。

（３） 摂社

ア、伊勢宮

以上で鵜沼皇大神宮については、ひとまず筆をおきます。

３ 戦前の歴史教育と神話

さて、ここで遡つて考えておきたいことは、戦前の国史への反省である。明治以来富国強兵を旨とし、昭和20年8月15日まで、皇国史観に培かれてきたが、この日をもつて忠君愛国の帝国主義は、一夜にして崩壊したのである。日本の歴史は水の低きに流れるように、誰でもが素直に納得できなくてはならない。作意的に屈曲されてはならない。終戦を境にして、日本の歴史の再構築が行なわれたと思う。そこで、かつては一つしかないと思われていた日本の神話であるか、これと同根のものと考えられる神話が、南方海洋民族とか、ユーラシア大陸の北方系とか、あるいはアジアとかヨーロッパに存在していた。例えば、イザナギとイザナミの両男女神がオノゴロ島に降りたち、そこで婚を結び、日本列島のたくさんの島々を生んだ。これに似た神話は、ポリネシアにある。たとえばハワイではワケアとい神がパパという女神と夫婦になり、パパはハワイ島とマウイ島を生んだ。ワケアはパパがタヒチ島に行つた留守にカウラと交わり、ライナを生み、またヒナと契つてモロカイ島を生んだ。パパはこれを知り、はらいせにルアと寝て、オワフ島を生んだ。のちにパパはワケアを赦し、夫のもとに帰つてカウアイ、ニハウなどの島々を生んだという。一般にハワイでは「島生みのパパ」と呼んでいる。パパは「大地」を意味するらしい。

天孫降臨の神話では、アマテラスと高木大神（タカミムスビ）とが、アマテラスの御子のアメノオシホミミを地上に遣わし、国土を治めさせようとするが、オシホミミの子のホノニギが生れたので、この皇孫が天降ることとなる。神勅とともに三種の神器が授けられ、前述のように、中臣、（天児屋根）、忌部、（天太玉）、猿女、（天宇受売）、玉造、（玉祖命）、鏡作、（石凝姥）の五部の伴造（とものみやつこ）の祖神、アメノコヤネ、フトダマ、ウズメ、タマオヤ、イシコリドメの五伴緒神（いつとものおのかみ）がこれに随伴し、日向の高千穂のクシフル峰に天降つたことになる。一方、朝鮮の「三国遺事」の檀君神話では、天帝がその子の桓雄に三符印という宝を持たせ、三人の風雨の神と三千の部下を伴い、太白山の山頂の檀という樹のかたわらに降下させ、その子が朝鮮を開いたという。この両者にいろいろの類似点があるが、高木神という名と檀君の檀が木の名であることは特に面

白い。

3 北のタカミムスビと南のアマテラス

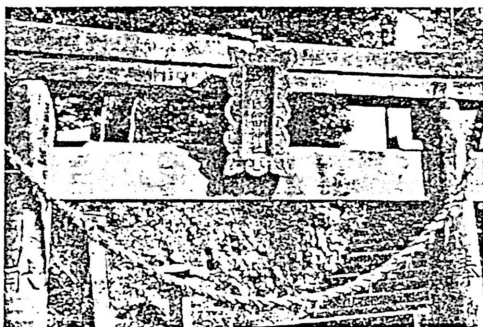
ご承知のように天孫降臨の神話は古事記と日本書紀にあり、ともに八世紀にまとめられたものである、それよりはるか昔のれい明期には、北方系のツングース系支配種族が朝鮮半島から日本列島に入りこんだ。しかし、それ以前からの先住者たちは南方の海を度つてきた種族からも農耕の知識や技術を伝えられており、かつ、彼らと同化してきたものと思われる。

八世紀の当時には、北方のタカミムスビと南方のアマテラスノ二神併立の神話を作らざるをえなかつたことになり、ついにはこの両種族の融合があつたことを示しているのではあるまいか。

4 天照大神と皇祖神

天照大神は、イザナギが亡くなつたイザナミを黄泉の国へ追つていき、追い返されて、日向の橘の小門（おとど）の阿波岐原で、みそぎされたときに生れた神様である。すなわち、最後に左の目を洗われると、アマテラスが右の目を洗われると、月読命が、鼻を洗われるとスサノオノミコトが化成したつある。この三神を三貴子（みつのうずみこ）という。

さて、「延喜式」という宮廷内の関係の深い神々の祭を扱つた祝詞（のりと）にも、アマテラスは殆ど出てこないで、「伊勢にまします神」となつてゐる。タカミムスビの方が元来農耕、出産の神で、皇室では古くから祖神としてまつていたものらしい。天孫降臨でも日本書紀本文の伝えなどには、アマテラスは出てこない。タカミムスビが本来の祖神であつたことが明らかである。「延喜式」神名帳をみると、山城、大和、丹波、播磨、対馬などの各地に天照御魂神とか天照神、天照玉命などという神社があつたことがわかる。これらの神社は、伊勢神宮系とは同系のもではなく、本体は地方神としての日（太陽）の神であり、伊勢の神だけが後に皇祖神という資格が与えられたために、他の天照神をしりぞけて天照大神とたたえらるゝようになつた。天照大神の別の名はオオヒルメムチである。一説によれば、折口信夫はオオヒルメムチという原義は「日女」では



対馬の阿麻彥留神社

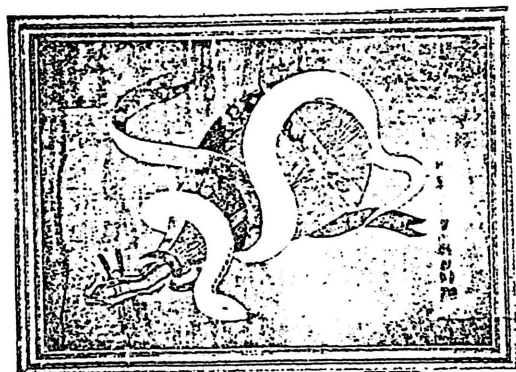
なく、「日妻」すなわち太陽神の神であるといい、男性太陽神、天照大神に妻として仕える女がヒルメであり、代々この女のイメージが祭神の姿に投影され、アマテラス即オオヒルメというかたちになり、女性化したものであらうといつている。アマテラスが皇祖神の位置を確立するに至るには、天武天皇の御代に太安万侶が筆録した古事記が編纂された時期と推定される。この当時は宮廷に神統意識が高まっており、祈年祭（としごいまつり）の祝詞の中にも、アマテラスへの賛辞があり、壬申の乱を媒介して、アマテラスの神徳をたたえている。天照大神への皇祖神という最高の地位がかたまつたのではないかともしう。

5 笠縫村から伊勢の宮居へ

天照大神が宮廷から伊勢にまつられるまでの事情は崇神天皇六年に『百姓流離へぬ
或いは背叛くものあり。その勢、徳をもつて治まること難し。是を以て、晨に興
き夕までに揚りて、神祇に請罪る。是より先に、天照大神、倭大國魂、二はしらの
神を天皇の大殿の内に並祭る。然してその神の勢を畏りて、共に住みたまふに安か
らず。故、天照大神を以ては豊鍬入姫命に託けまつりて、倭の笠縫邑に祭る。』倭
大國魂の神は大物主神（大國主神）であり三輪山の祭神とされたのである。このこ
とは天照大神と地主神である大物主神はこれまで朝廷の殿内にまつっていたが、い
づれも神威が強いので、いつしよにいては夜もおちおち眠られないので、崇神天皇
は天照大神を笠縫村へ大物主も三輪山に追い払つてしまつたものだともいう。しか
し、大物主神はオオタタネコを通し、朝廷にその不満をおつける力があつたが、ワ
ダツミのアマテラスには既にそれだけの神威がなかつたのである。笠縫から伊勢の
五十鈴の川上に常宮を定められるまで、実に24回も宮居を転々とされたことにな
る。

6 華南の海洋民と天后

ここまでは記紀を中心に天照大神に
ついて書いてきたが、当時の時代の
背景を考えてみる。弥生から古墳時
代初期にかけて、当時華南の沿岸地
帯に住んで主に海洋に生計の場を求
めていた種族は、何らかの形で九州
南部に影響を及ぼしていたものと思



う。これらの種族には、海の神への崇拜、海の神にまつわる物語りは多かった。広東省とか広州で漁労もするが、農耕技術もあり、漂流に近い形で九州の各地沿岸に上陸した人々



与太姫とワダツミ（北斎展「貴婦人と竜図」より）

には当然海洋での信仰する神を持っていた。天后もしくは天妃とよばれる神であるわが国ではなじみ薄いですが、弁天様というとなじかな感じがする。天后は竜女ともいわれる海神（ワダツミ）で航海の平安を掌る。この天后のまたの名を娘鰲神女（のうましんじょ）といい、中国では「ニャンマ」神女という。天后の信仰圏は広東省福建省などの沿岸部で、さらに広く南支那海から東支那海も含める広大なものと考えられる。わが国におけるワダツミは氏の上で大綿津見である。娘鰲神女は漁労に従事する海人のために海中に身を投じて、彼らの安全を祈ったという伝説もある。わが国でも地名としては鹿児島半島西部に突き出た野間半島の中腹に野間神社がある。「野間宮」の由緒には海中に身を投じた娘鰲の死体が野間岬に漂着したので、これを野間岳にまつたという。野間宮には東宮と西宮に分れ、東宮には木花之咲耶姫（ニニギノミコトの妻となつた）が、西宮には娘鰲神女がまつられている。また、長崎にも野母崎とノーマから変つた地名もあるし、長崎県の崇福寺鰲祖堂ではボサ棚（ボサは菩薩の意味）にノーマをまつている。このことは九州では華南の漁民が永い間かけて移住し、その土地在来の人々と混血していったことが予想される。日向三代といわれる神々はホノニギが山の神、大山祇（九州に住んでいた）の娘、阿多津姫（木之花咲耶姫）と結婚したが、次のヒコホホデミ（海幸、山幸の弟山幸のこと）が海神の娘豊玉姫と、次のウガヤフキアエズが豊玉姫の妹の玉依姫とそれぞれ結婚したことなどを勘安すると南の海から渡つてきた種族も日向において生活していたことを意味するはずである。

ア 日本古代史の新解釈

ここに一つの仮定として、南海の種族と混血で邪馬台国が成立していたとすると、この娘鰲（中国ではニャンマと発音する）神女を祖神とする国の人々がニャンマた

い(たいは九州弁のたい)としやべつているのを魏の国の人々が邪馬台となまつてきき本国に報告したのかもしれない。天照大神は別名をオオヒルメムチという。大日靈女貴尊(おおひみこむちのみこと)とも称し、邪馬台国の女王卑弥呼と同一人物と考える。そして邪馬台国の人々は魏志倭人伝にあるように、海洋民族の流をくむ人々と推定できる。最初にしるした資料のF・古代日本正史によると日本列島での最初の王はスサノオであるとする。このスサノオの第五子のニギハヤヒは大和に派遣され、その国を治めていた。一方でスサノオは日向の国まで出てきて、卑弥呼と結婚した。そして三女神をもうけた。三女神とはタギリ姫(多紀理)サヨリ姫(狭依)タギツ姫(多岐津)の三姉妹で、宗像神社の祭神である。(江の島神社の祭神も同じ)古事記では、天安河のうけひの段で、天照大神がまずスサノオの十拳剣をもらいうけて三つに折り、さらさらと天之真名井にふりそそいで、噛みに噛んで息を吹き捨てた。その息吹のさ霧に、多紀理毘売命、市寸島比売命、多岐津比売命の三女神が生れたとある。スサノオはしばしば卑弥呼を訪問をしていたが、その死後出雲の大国主命が日向の政治をみるようになり、多紀理姫との間に高日子根、高姫、事代主と三人の子が生れた。大国主は出雲に正妻の須世理姫がスサノオの娘として存在していた。一方、大日靈女の長男がアメノオシホミミにあたり、福岡県田川郡添田町の英彦山神社の祭神である。第六子がホノニギで大山祇の娘阿多津姫と結婚した。第七子がヒコホホデミで豊玉彦の娘の豊玉姫の養子になった。豊玉姫は指宿市の北端、鹿児島湾に面した今泉というところに豊玉姫神社がある。第八子がウガヤフキアエズで「熊野楠日尊」ともいう。豊玉姫の妹の玉依姫をめとつて五瀬尊、稻飯尊、三毛入野尊、伊波礼彦尊をもうけた。末子伊波礼彦尊は神武天皇であり、大和を治めていたニギハヤヒの養子になり大和へ赴く。これが神武天皇御東征にあたる。

さて、卑弥呼なきあと、この国は大いに乱れたが、卑弥呼の宗女台与(とよ)が立つに及んで、国中ついに定まると倭人伝にある。この台与が伊勢神宮の豊受大神である。—— 以上は文献(F)の「古代日本正史」の抜粋である。ここで別の一つの仮定を考えてみる。それはアマテラスは海照る神のニャンマ神女であるということである。天安河でのアマテラスとスサノオの両神の「うけひ」のことは、アマテラスはスサノオの剣(男根)から胤をうけ、アマテラスの分身である宗像(海方)の神という三女神を生み、スサノオの子として遣わしたことになる。このことは北のスサノオと南のワダツミが、縁を結んだことになるので、さき書いたアマテルが大和を追われたことは、伊勢に宮居が定つたとはいえ、王権がその確立以

前にワダツミの一族から蒙った恩を仇で返すことになりはしないか。アマテルの本
来が海照るの航海神、ニャンマ神女とする仮定も、面白い推理ばなしである。

㊦ むすび

現在日本人と呼ばれるに至った種族のそもそも存在しはじめた時代は、少くとも2
万年前らしい。その後に縄文時代に入り、この時代が8千年程続いた。約2千年前
になると日本人として固定された人々が、この日本列島に住むようになった。弥生
時代には、水稻耕作が移入され、農耕の知識技術が定着した。この時代から古墳時
代にかけて、南方海洋種族と、北の渡来人などとの混血が行なわれ、一層現代日本
人の遠い時代での基盤が固まつてきた。概して日本人の体格の特徴は北方モンゴロ
イドのものといはれる。つまりどちらかといえば南方の原モンゴロイドに近い縄文
人の中に同化していったものと思はれている。

歴史を実証するものは、古墳からの発掘物とか、考古学での物証に基づかなくて
はならない。しかし、八世紀における歴史編纂には、魏志倭人伝とか、多分その頃
存在したと思はれる常陸、出雲、播磨、肥前、豊後の五風土記とか、または古代か
ら伝わってきた古い神社の祝詞などを参考にしたり、語り部たちに記憶され、いい
伝えられてきた物語りも無視するわけにはいかなかったであらう。古事記につい
ていえば、天武、持統、文武、元明と続く712年に完成されているのであるから
当時の状況の上に中国や朝鮮、また南方からの神話、伝説などを取り入れ参考にさ
れて完成されたはずである。日本書紀も元正天皇の養老元年、717年に完成し、
その時代は672年弘文元年の任申の乱の勝利の勢いに乗った天皇家が王権の確立
に努め、国家統一、国威高揚の意気旺んな時代におけるものであつた。と同時に天
照大神の皇祖神としてその神威の確立した時期でもあつた。古事記にある倭が書紀
には日本と国名を改め、太陽が昇りはじめる国といった誇らしげな、意気洋洋と優
越感を内に秘めた時代と推察される。

鵜沼皇大神宮をとりあげ、多方面から推理した物語は、以上で終らせたい。要す
るに天照大神といえども、すんなりと皇祖神にまつられたのではなく、日本国の成
立にまつわる靈魂その他おどろおどろした生臭い人間臭い業とか欲望とか運とか策
謀とか、大変人間くさい混然とからみ合つたなかから生れた皇祖神である。神話か
ら歴史への転換は、元から異質なもので、転換がそのままできるという発想そ
のものが間違っている。神話はそれが生じた時代の人々の思想に適合した故に、い
まに伝わっていると思う。

鵠沼三美人のこと

田中まさ子

この夏は猛暑と言いながら、何という暑さだろう。クーラーなしで一日も遅れない、この暑さで「惚け」が、一段と進むのではなかろうかと不安でいつばい、老いるばかりであることも、このことも、と書いておきたいことはメモをしておいて、朝の時間一寸と机に向うのだが、頭がぼろとなり、何しとつまとまらないのに、自分乍ら切ない気持になる。

気張って見ても仕方がない、又明日にしようと、もうペンは持っていない、幾日か過ぎた。　そうだ・軽い気持で楽しいことを思い出そう、それがいいと・自分に言い聞かせて、まづ鵠沼の静かな平和の日々を思い出した。　あの頃（昭和七・八年）鵠沼は静かで清らかな海と美しい富士山が裾をひいて、半農半魚の小さな町に、素朴な土地の人々はみな人がよく親しみやすかった。私は子供が弱かったので小女と三人で、松林の中の小さな貸し別荘に住んでいた。

きれいな空気、日光を求めて、海岸の別荘にはどの家にも療養者が家族と住っていた。　潮騒、松籟、と朝夕はどんなに風流であろうと、喜んで来て見たが、風流よりも何んだか東京をはなれ、島流しになったような淋しさはどうしようもなかった。　海辺へ散歩にゆき親しくなった家族の人達も同じ思いであった。そんなある日のこと、海岸通りの有田さんへ今日お嫁さんが来るということを聞いた。　これはこの小さな町の一大ニュースであった。　何をおいても、見に行きましょいうねと連れ立って有田さんの店まで行った、店の入り口まで新しい敷物が長く敷かれていて、堤燈を持った出入りの職人さんが大勢い出てお嫁

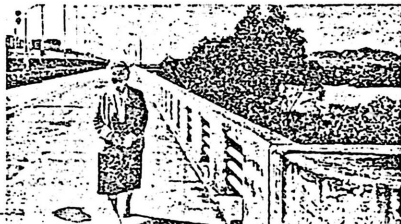
さんの車を待っていた。その頃の有田さんは、お肉屋はほんの小さな仕事で、伯父さんは大きく請負の仕事をなさっていた、とてもお盛んな、ハデな婚礼で、花嫁さんが車から降りて歩むとみんな溜息をした。小さな町で見る振り袖の花嫁さんは美しく清らかだった。当分の間私たち是有田さんのお嫁さんで満足したが、松ぼっくりの音にも淋しさはました、いつ治るか分からない療養生活は長い、私の知人も長く鶴沼で病んでいた。お医者様のお嬢さんが今度結婚なさって、今日は挨拶に見えますから、ぜひいらっしやいと言づてがあった。さあ行かなければと坊やを背負って行った。若い初々しい花嫁さんの美しさ品のよさ、今日はよかったとしみじみ思った、この花嫁さんは福田光代さん、今も美しい姿でよく買い物に出られるのを海岸通りで見かける。有田まさよさんは今でもお店のお手伝い出来る明るいおばあちゃんになられている。ご主人に早く別れ鶴沼に住む歳月は五十年以上になっている筈である。

戦前はいつも鶴沼は、仮住居としか考へなかったが、今はちがう、私や子供にとっては故里なのである。「田中さん、鶴沼三美人をご存知ですか」と、戦前から鶴沼に住って居られる、古い方に聞かれた、「サアねえ」、一がいに言えませんよ、みなその人なりの見方ですからね」と答えておいた。心にとめたことはないけれど、言われて見ると鶴沼を代表する美人はある、私の心の中にも、現存して話し合ってる人も他界された人も、私の心の中で決められる、《これは楽しいひとである。》

去年の選挙の日、久し振りで三輪梅三郎さんにあつた、お元気で自転車から降りると、<ホラ、あそこに鶴沼小町がいるよ、>と言われる、「ええっ」と振り向いたら、娘さんらしい人に支えられて歩いてくる二

ニコニコとしたおばあちゃんである、《何んだ魚直のおかみさんぢやあないの、》<この人が本当の鶴沼小町なんですよ>と言われて見ると、なるほど鶴沼小町である、円満なふっくらとしたよい顔をしている、おばあちゃんは一層ニコニコして、「嫌です様、私なんか」としきりに笑いくずれる、<まあいいさ、卒塔婆小町ってのもあるからね>と悪いことを言われる。本当に円満なよい顔をして昔から働きものであつたそうなの、私は嬉しくなつて了つた。 いづれにしてもこうした古い地道な人達の中に苦勞を忘れさせる、美しいものがあると信じている。ただの美人ではない。鶴沼がいつまでも美しい清らかなものを持ち続けたいものだ人にも風景にも祈りたい気持である。

五十三年前に渡り初め
一步一步に感慨



解任作の遠くにいる湖南大橋に立つて馬場マサ子さん。50年前に渡り初めた時、くっきり見えた富士はこの日もほははんと見えていた。翌は新大橋＝3日、茅ヶ崎と平塚の市場で

思い出の橋よ さようなら

消える
湘南大橋

「思い出の橋よ、さようなら」馬場マサ子さんの著書「思い出の橋よ、さようなら」が、湘南大橋の消滅を告げる。馬場さんは、50年前に渡り初めた時、くっきり見えた富士がこの日もほははんと見えていた。翌は新大橋＝3日、茅ヶ崎と平塚の市場で

「鵠沼を語る会」会員名簿

昭和62年度

	氏 名	住 所	電 話 番 号
○	有田 裕一	鵠沼海岸2-1-20	36-7298
	石井 礼子	鵠沼海岸6-16-14	34-0036
	岩田 吉人	鵠沼海岸2-10-24	36-7593
○	内田偉三男	鵠沼藤ヶ谷3-4-27	23-1011
	遠藤 隆二	鵠沼松が岡3-12-3	26-7233
	遠藤 綱	鵠沼松が岡3-12-3	26-7233
	榎本 一男	鵠沼海岸2-7-3	36-7208
○	大久保和夫	鵠沼花沢町5-5	23-0790
	大橋 円明	鵠沼神明3-3-21	22-9080
	川島 弘之	本鵠沼5-5-12	22-9679
	菊田 九郎	片瀬山3-2-6	24-0729 24-4833
	葛巻左登子	鵠沼海岸3-11-5	
	後藤 俊子	鵠沼藤ヶ谷2-2-4	26-1792
	久保 尚雄	藤沢3745-5	81-2901
	斉藤 功一	鵠沼海岸2-4-5	36-7640
○	佐藤 和子	鵠沼海岸1-4-3	34-2156
◎	塩沢 務	鵠沼海岸3-12-33	36-7876
	鈴木 太仁	柄沢255	23-0012
	田中まさ子	鵠沼松が岡3-3-9	22-5667
	田中 一一	亀井野400-10	82-3456
	竹縄 芳隆	鵠沼松が岡4-10-26	22-4992
	常深 次郎	鵠沼海岸3-1-12 鵠沼海岸郵便局	36-4921
○	寺田 良夫	鵠沼橋1-14-5	22-2718
○	中村 孝治	鵠沼海岸1-3-2	36-4591
	仁平 久秀	鵠沼海岸1-3-7	34-0578
○	花輪 桂	鵠沼花沢町9-8	22-8317
	長谷川一夫	鵠沼桜が岡1-3-8	22-5094

○	榛葉 昭市	本鵠沼 2 - 1 9 - 1 0	36-6651
	逸見千鶴子	鵠沼松が岡 4 - 8 - 1	22-3986
	升谷イト子	鵠沼海岸 6 - 1 7 - 6	33-0228
	持田 眞男	鵠沼桜が岡 3 - 1 0 - 5	22-7536
○	吉田 興一	辻堂 6 7 3 6	36-6818
	事 務 局	鵠沼公民館	33-2001